

「天気を予想する」(光村図書・小学5年)の巻(補論)

加藤 郁夫(読み研事務局長)

この説明文は、本論Ⅰを受けて本論Ⅱがありさらにそれを受けて本論Ⅲがある文章構成になっています。本論1と本論Ⅱの論理関係はどのような言葉で表せばよいのでしょうか。段落相互・文相互は「補足」「前提」「累加」等の関係を表す言葉がありましたが、論と論の関係にはそれらはあてはまらないのでしょうか。

上記のような質問をいただき、少し考えてみたのが以下の文章です。

「天気を予想する」の「本論1」「本論2」「本論3」相互の関係をどう考えるか。その際に、「本論」相互の関係について幾つかのパターンを想定しておき、それに当てはめていくというやり方はあまり意味が無いように思う。それよりも、それぞれの文章において、「本論」がどのように展開しているかを考える方が有効であると考え。

もちろん、これまでの説明的文章ではどのような展開があったかを想起することは有効であると思う。光村図書の教材で述べると以下のようなものがある。

「じどう車くらべ」(小1)は、並列型で、身近な車から述べられていた。

「たんぼのちえ」(小2)は、時間の順序にそって述べられていた。

「ありの行列」(小3)では、実験・観察から仮説をたて、その仮説を研究により明らかにして「なぜ、ありの行列ができるのか」を明らかにしていく追究型とも言える述べ方であった。

「アップとルーズで伝える」(小4)では、対比を使って述べていた。

それでは「天気を予想する」はどのような本論展開になっているのだろうか。

まず、再度構成を確認しておこう。

本論1 1～3段落(的中率はどのように高くなったのか?)

本論2 4～6段落(的中率が100%にならないわけ)

本論3 7～9段落(突発的・局地的天気を予想する手立て)

結び 10段落

この構成について「27年度版教科書つれづれ17」で私は次のように述べた。

この文章には「序論」がない。「天気を予想する」という題名が話題提示の役割を果たしており、いきなり本論に入っている。そして、この文章では大きく3つのことが述べられている。しかし、それは3つが並列に述べられているのではない。「本論1」を受けて「本論2」があり、さらにそれを受けて「本論3」がある。順序に必然性があるのだ。言い方を変えれば、「本論1」から「本論3」に向けて絞り込んでいくような書かれ方といえる。つまり、この述べ方は3つのことを述べている文章だという理解だけでなく、「本論3」の部分に筆者がより伝えたいことがあるのではないかと考えることが可能となる。

「本論1」～「本論3」の関係を、もう少し詳しく考えてみよう。

「本論1」は天気予報について述べる。天気予報の的中率が高くなってきた理由を述べている。「本

論 2」は、「本論 1」を受けて天気予報の的中率が 100%になるのは難しいと述べる。ここまでは天気予報について述べている。天気予報の精度は上がってきたが、それが完璧なものになることは難しいというのである。

「本論 3」は、次のように始まっている。

それでは、突発的・局地的な天気の変化を予想するために、できることはないのでしょうか。わたしは、いくつかの手立てがあるのではないかと考えています。

ここだけでは、はっきりとしないが次の 8 段落の最初に「実際に自分で空を見たり、風を感じたり～」とあり、天気予報の話題から、一人一人が天気を予想することへと話がかわっている。

「(天気を) 予想する」という言葉は、6 段落までにも出てきている。しかしそこでは「予想する」主体は、気象庁をはじめとする気象の専門家たちである。

#### \* 2 段落⑥⑦文

「これらの観測で得た情報は、気象庁のスーパーコンピュータに送られ、そこで、何種類もの予想図が作成されます。科学技術の進歩によって、観測装置やスーパーコンピュータの性能、情報を伝達する仕組みがすぐれたものになり、より速く、正確に予想できるようになってきたのです。」

#### \* 3 段落⑦文

「このような国際的な協力が進んだことで、より多くの情報をもとにした、天気の予想が可能になったのです。」

#### \* 5 段落①文

「天気の予想をむずかしくしている要因の一つに、短い時間に非常にはげしくふる雨などの突発的な天気の変化が挙げられます。」

#### \* 5 段落⑥文

「そのため、いつはげしく雨がふり出すのかを正確に予想するのはとてもむずかしいのです。」

#### \* 6 段落⑤文

「広いはんいの風や雲の動きは分かっても、せまいはんいでは、それがどこでどのように変化するのか、予想するのは簡単ではありません。」

ところが 7 段落からは「(天気を) 予想する」主体は、「それぞれの場所にいる一人一人」なのである。

「(天気を) 予想する」主体が、6 段落までと 7 段落以降でははっきりと変わっている。

論の展開をもう一度整理してみよう。「本論 1」「本論 2」では、天気予報の精度は上がってきたが、完璧になることは難しいと述べていた。それを受けて「本論 3」で、一人一人が「(天気を) 予想する」ことの大切さを述べる。

つまり、「本論 1」から「本論 3」に向けて絞り込んでいくような書かれ方、「本論 1」「本論 2」は天気予報について述べ、「本論 3」は一人一人が「(天気を) 予想する」ことを述べていること、さらには「本論 3」で「(天気を) 予想する」主体が、それまでの専門家から私たち一人一人に変わっていること、以上のことから「本論 3」にこそ筆者の一番述べたいこと、言い換えれば筆者の主張があることは明らかであろう。

「結び」にあたる 10 段落を見てみよう。

科学技術の進歩や国際的な協力の実現によって、天気予報の精度は向上してきました。それによって、わたしたちの生活はいっそう便利になっています。しかし、いくらの中率が高くなっても、「今、ここ」で天気の変化を予想し、次の行動を判断するのは、それぞれの場所にいる一人一人なのです。そのことをわすれず、科学的な天気予報を一つの有効な情報として活用しながら、自分でも天気に関する知識を

もち、自分で空を見、風を感じることを大切にしたいものです。

傍線部の箇所が、筆者の主張である。「本論3」に筆者の一番述べたいことがあったのだから、それを受けた「結び」になっているのは当然のことである。

その際に、「結び」の中に「本論2」の内容が全く触れられていないことが気になるかもしれない。その点については、次のように考える。

「天気予報の精度は向上してきました（注）」「いくらの中率が高くなっても」といった表現の裏側には、「天気予報は百パーセント的中するようになる」ことはむしろかしいといった意味合いが隠れている。改めて述べなくても、伝わるから述べなかったのである。これは決して私だけの主観的なものではない。9段落まで読んできた上で、10段落を読むのである。読者は天気予報が完璧なものになることの難しさをすでに読んで、了解している。さらに言えば、天気予報の精度が100%になることの難しさは、日々の生活実感として読者に了解されている。天気予報が外れたり、ズレたりしてがっかりしたり、場合によっては喜んだりした経験を、私たちの誰しもが持ったことがあるだろう。突発的な天気の変化や局地的な天気の変化は、私たちが日常の生活の中で体験していることでもある。だからこそ、改めて10段落の中で述べなかったのである。

（注）「向上してきました」という表現の読みについては「教科書つれづれ17」を参照。

試みに、「結び」に「本論2」の内容を入れてみた。

科学技術の進歩や国際的な協力の実現によって、天気予報の精度は向上してきました。それによって、わたしたちの生活はいっそう便利になっています。しかし、いくらの中率が高くなっても、**100%の的中率になることはありません。突発的な天気の変化や局地的な天気の変化は、予想することが難しいからです。**「今、ここ」で天気の変化を予想し、次の行動を判断するのは、それぞれの場所にいる一人一人なのです。そのことをわすれず、科学的な天気予報を一つの有効な情報として活用しながら、自分でも天気に関する知識をもち、自分で空を見、風を感じることを大切にしたいものです。

それほど元の文章と変わるわけではないが、ややくどい感じを私は受けるがどうだろうか？